

二〇世紀初頭の北部ハンガリーにおけるカトリシズムと

スロヴァキア・ナシヨナリズム

井出 匠

問題設定

近代における政治運動のうち、特定の「ネーション」を中心的な利害・権利の主体とみなし、その制度的確立と強化をめざす運動がナシヨナリズムである。ナシヨナリズムの実践者（ナシヨナリスト）は、利害・権利主体としてのネーションを、固有の实在、実質的集合体とみなす。一方でネーションとナシヨナリズムの分析者の側は、そうした当事者のな立場から距離を置き、よりメタな視点に立った解釈上のアプローチを試みる必要がある。

そうした分析的アプローチの例として、二宮宏之が提唱したネーションおよび「エトノス」が挙げられる。二宮に

よれば、ネーションは政治的支配の次元に属し、エリート
のヘゲモニーにより「上から」もたらされ、何らかのイデ
オロギーのもとで政治的統合の機能を發揮する擬制／作為
的な集団概念である。したがってそれは政治的契機が強く、
より表層的な「共属意識」に支えられる。一方のエトノス
は、社会的結合の次元に属し、「人と人との日常的な関わ
り合いのなかから、自然的に生まれる結合」である。そ
れは、アプリオリな日常世界の場において、言語・宗教・
慣習といった文化的契機を紐帯とする、より深層的な「共
属感覚」に支えられる。

二宮のこの議論からは、さらに次の観点が導かれる。ネー
ションを支えるとされる「共属意識」は、政治エリートで

あるナショナリストの操作的介入により、広汎な人々の社会認識に能動的に作用する言説実践として読み替えることができる。また、エトノスの紐帯としての「共属感覚」は、民衆的な「日常性の枠組・規範」（近藤和彦）と近似であると考えられる。ただし小沢弘明の指摘によれば、エトノスはけっして「原初的・自生的・生得的なもの」ではなく、むしろ中・長期的な発展プロセスにおける歴史的形成物である。すなわちそれは、ある程度の時間をかけて定着した具体的な社会関係として読み替えることができる。そして再び二宮によれば、ネーションとエトノスは必ずしも対抗的な関係にあるのではなく、むしろ相即的な、互いに交錯する関係にある。したがってネーションとしての統合も、むしろエトノスを媒介することで進展するものと想定される。そこから、「エトノスのレベルからネーションを問い直す試み」（森明子）の必要性が導かれるのである。

以上から敷衍するならば、二宮の提示するエトノスとネーションの媒介関係を、既存の社会関係とナショナリズムの言説実践との対応関係として捉えなおすことが可能となるだろう。

スロヴァキア・ナショナリズムの特徴と展開

近代ハンガリー王国の公式理念は、政治的単位として単一不可分の「ハンガリー（マジャル）・ネーション」のみが存在するというものであり、それに基づいて国家公用語としての「マジャル（語）化」が推進された。したがって、同国は実態としては多言語社会であったにもかかわらず、言語的少数派を指す「ナショナリティ」が、個別に「ネーション」を要求することは認められなかった。これにたいして、スロヴァキア・ナショナリズム運動は、ハンガリー王国北部のスロヴァキア語住民から構成される集合的権利主体としての「スロヴァキア・ネーション」の存在を想定し、その公的権利、とりわけ言語的権利を議会や公論の場で要求することを目標としていた。そこでは「スロヴァキア・ネーション」あるいは「スロヴァキア人」の集合的利害の一体性が強調され、それがマジャル（語）化によって抑圧されているとの主張が展開された。

他方でハンガリー王国は、カトリック、プロテスタント諸派、正教などからなる多宗派社会でもあった。とくに農村部においては、言語やナショナリティよりも、むしろ宗派がコミュニティや政治的忠誠の基礎を形成していたとされる。スロヴァキア・ナショナリズムの観点から、言語的

二〇世紀初頭の北部ハンガリーにおけるカトリシズムとスロヴァキア・ナシヨナリズム（井出）

基準にもとづいて単一の「スロヴァキア・ネーション」とみなされた人々は、おもにローマ・カトリックとルター派からなっていた。ただし一九世紀末までのスロヴァキア・ナシヨナリストの多くは、スロヴァキア語住民のなかでは少数派であるルター派の知識人であった。したがって多数派であるカトリック信徒にたいしては、わずかな政治的影響力しか持ちえなかった。そこで一九世紀末には、より広汎なスロヴァキア語住民の支持の獲得を目指す新たな潮流がスロヴァキア・ナシヨナリズム運動の内部に出現した。とくに、ハンガリー王国の全国的なカトリック政治運動を主導したカトリック人民党に属するスロヴァキア・ナシヨナリストには、信徒に多大な影響力を有する教区聖職者が多く含まれていた。

一九〇五年の後半から翌一九〇六年初頭にかけて、スロヴァキア語の権利拡大に冷淡なカトリック人民党から離脱したカトリック聖職者の活動が顕著となった。一九〇五年末には、カトリック・ルター派双方のスロヴァキア・ナシヨナリストを含むスロヴァキア人民党が結成された。同党の機関紙として位置づけられていた『スロヴァキア週報』および『カトリック新聞』は、これ以後積極的な拡張活動により購読部数を増加させた。こうした新聞の読者の一部は、読者通信と呼ばれる記事を頻繁に寄稿した。そしてそれを

通じて、地域社会のレベルで自身が直面する様々な問題状況について、編集者や他の投稿者とも共有化された言説の様式（レトリック）を用いて把握し、明確化し、争点化していった。

そうしたレトリックにおいて、書き手／読み手がともに属する集合的利害主体（Ⅱ我々）として一義的に設定されるのは、「スロヴァキア人」「スロヴァキア民衆」などの「同胞」カテゴリーであった。他方、同胞カテゴリーと対立する集合的利害主体（Ⅱ敵）として、「敵」カテゴリーが設定された。この敵カテゴリーとしては、個別の文脈に応じて「マジャル人」「マジャロン」「旦那衆」「自由主義者」「ユダヤ人」「チヴァフ」などが多く用いられるが、それらはいずれも非「スロヴァキア人」であることを示唆していた。このような言説実践において、特定の個人や集団にたいして同胞／敵カテゴリーが適用される際の基準は、その具体的な文脈としての社会関係（Ⅱエトノス）を反映して、多様かつ複合的なものとなる。この結果、各種カテゴリーによって構成されるナシヨナリズムのレトリックも、多様な社会的・政治的文脈に柔軟に対応したものとなりえた。

エトノスとしての教区社会と

スロヴァキア・ナシヨナリズム

ではそうした多様な文脈のうち、北部ハンガリーの、とくに農村地域に生きるカトリック信徒にとつて、主要な社会関係（Ⅱエトノス）をなしていたものは何であったのか。それは、宗教的・社会的な共同体としての教区において、教区民とその精神的指導者である聖職者とのあいだで直接的に取り交わされてきた関係性であったと考えられる。そしてそれは、聖職者による社会・政治問題への積極的なコミットメントや、聖職者自身の個人的な魅力、また教区の自立性を侵害する外部権力への反発（教区・パトロン権問題）などによって、より強化されたのである。

スロヴァキア・ナシヨナリズム運動のローカルなエージェントが、とくに右の関係性を活用できるカトリック司祭であった場合には、運動にたいする教区民の支持獲得に成功する例も少なくなかった。本報告で取り上げた新聞読者通信の言説は、こうした状況を反映しており、同胞／敵カテゴリーの適用対象や、それらにより構成されるレトリックは、教区を舞台とした具体的な社会関係のあり方に対応したものとなっていた。

以上のことから、宗派総体としてのローマ・カトリック

教会が一般民衆の社会的アイデンティティの基盤、すなわちエトノスであり、したがってそれがそのままネーションにも接合しようとする抽象的かつ単線的な理解は、成立しがたいといえる。その点は、ルター派よりもカトリック教会の上層部に敵意を示した教区民の事例からも明らかである。かれらにとつてのアイデンティティの抛り所は、ローマ・カトリックという宗派ではなく、あくまで自分自身の属する教区社会であり、しかもそれは日々の生活や教会建設などの具体的な共同行為を通じて、歴史的に培われてきた共同性（Ⅱエトノス）であったといえる。

（本学文学部特任准教授）